とある御坂と禁書目録

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある御坂と禁書目録

【Ｎコード】
Ｎ７８８９Ｙ

【作者名】
久留間水樹

【あらすじ】
もしもあの時上条ではなく御坂に出会っていたら…？　そんなもしものと禁ｓｓ。御坂が鉄橋での戦いの後出会ったのはシスター服の少女インデックス。彼女の生きる世界に足を踏み入れた御坂は――。　こういう話なので多分かなり原作とは違うと思います。あ、キャラは原作の人がいっぱい出てきますが。妹達編もやるつもりですし。御坂好きとインデックス好きにはぜひ読んで欲しいですね。原作での御坂とインデックスのスルーっぷりに落胆している貴方！ちゃんと二人が活躍しますのでどうぞご覧になってください！（笑

序章　超電磁砲と行き倒れのシスター少女

七月一九日。
御坂美琴はいつもどおりあの男と鉄橋で戦った後、することもないので夜道をプラプラと歩いていた。

「あーっもう、今度あったら絶対容赦しないんだから！」

ビリ、と彼女は額から電気を出すと、彼女の近くを歩いていた少年や少女が慌てて遠くへ避難した。
御坂美琴は学園都市の第３位の超能力者である。ついたあだ名は”超電磁砲（レールガン）”。だからこそ、負けるなんて屈辱は許せないのだ。
でもまあ、目標が出来るのはいいことよね、と言い聞かせていた美琴は、はた、と足を止めた。
そして、そのまま硬直する。

目の前には、白いシスター少女が倒れていた。

「…何、これ」

美琴はボソリ、と呟いた。
そして、溜息をついてその場にしゃがみこみ、ぺちぺちと頭を叩く。

「おーい生きてますかもしもーし」

何だこれ、と美琴は口の中でもごもごと言う。

美琴の良心はこのままほっとけるかー！と美琴をせかしているが、どうにも。
と、その少女はピク、と手を動かし、その瞬間――
「お腹減った！！！！」
「はァ！？」

と、美琴に飛びかかった。「にぁっ！？にゃにふるにょよっ！」と美琴は動転しつつ電撃を出さないように自制する。シスター少女はお構いなしに叫ぶ。

「ご飯ご飯ご飯ーッ！！」
「わ、分かった、分かったから！！」

美琴は取り敢えずシスター少女を引き離し、もう一度、ため息。
シスター少女はこっちを見てうるうると涙目で訴えてくる――
（外国人…？）
そこで美琴はこの少女が銀髪碧眼なのに気づいた。成程。中々可愛い顔をしていた。
このまま放って置いたら違う意味で危険な気がした。
……金ならある。

「分かった。じゃあどこかご飯食べに行きましょう」
「ほんと！？ありがとうなんだよ！！」

美琴が立ち上がると、シスター少女もぴょこん、と立ち上がった。
どうやらついてくる体力はあるらしい。
美琴は近くのジャンクフード屋に、足をいそいだ。

序章　超電磁砲と行き倒れのシスター少女（後書き）

感想や評価頂けたら嬉しいです！

第1章―1　インデックスと名乗る少女。

まず美琴が驚いたのは少女の食べっぷりだった。
ひと皿ひと皿、確実に、しかもかなりのペースで消化されていく。皿を持ってくる店員も若干引いているらしく、皿をテーブルに置くとすぐに奥へ引っ込んでしまう。

「……一体どうしてそんなに入るのやら」

美琴がつぶやいている声が聞こえたのか、シスター少女はにっこりと可愛らしい笑みを浮かべて

「美味しいからだよ！」

と言った。意味が分からない。
少女の食欲に触発されたのか、美琴も少し皿の料理をつまんだ。普通の冷凍食品の味だった。
数分で計４８皿を食べ終えたシスター少女はにこにこと笑ってまず、「ありがとう！美味しかったんだよ！」と礼を言った。

「自己紹介をしなくちゃね」彼女は唐突に言った。「私の名前はね、インデックスって言うんだよ」
「……インデックス？」

美琴は聞き返した。変な名前だ。
日本語でいうなら『目次』か。

「見てのとおり教会の者なんだよ。あ、バチカンじゃなくてイギリス清教の方だけど」
「えと、ふぅん……？」

よくわからないが美琴はとりあえず頷いておいた。
まあ、つまりはシスターなのだろう。その服装と同じく。

「ねえ、なんであんな所で倒れてたの？」

美琴は疑問に思っていたことを口にした。インデックスはああ、と笑って

「追われてたの」
「……、」

美琴は黙った。
追われていた？
この少女が？

「何？あんたの能力ってそんな、追われるほど貴重なものなわけ？」

だとしたらうなずける。大方、研究に嫌気がさして逃げ出したのかもしれないし。
が、インデックスはううん、と首を横に振って

「魔術師から」
「……まじゅ、つし…？」

知らない単語（ワード）に美琴は眉をひそめた。
インデックスが嘘を言っているわけではなさそうだが、魔術師と

いったらアレか、魔法をばーっとつかうやつかしら？と美琴は頭の中で考えた。

「それって、魔術ってこと？」

「そうだよ。魔術。魔術を使うのがこっちの専門だからね」

「……そんなものが、実在するの？」

そんなことを言う美琴にインデックスは笑って

「あなたが知らなくていいことかも。あなたは凄く……この都市の住民、って感じがするから」

お前には関係ない、と突き放されたのだ、と美琴はそう理解した。

インデックスは口を布巾で拭いた。口元についていたソースが拭われる。

美琴は黙ってそれを見ていた。

「……おわれてるって、何から？」

「んー、私も分からない。どこだろう。連中、いっぱい組織があるから」

「連中？」美琴は聞き返した。

「うん。――魔術結社の者ってことは、確実だけど」

インデックスはさらりと。当然のように言う。

美琴は何故だか――何故か、体中からにじみ出る汗によって制服が微量に濡れていることにも気がつかず、

「魔術結社って、何？」

「あなたは知りたがり屋さんなのかな？だから、あんまり足を突っ込まない方がいいかもって、私は思うんだよ」

「つまり、それほどのことにあんたは足を突っ込んでるってことでしょ？」

美琴の鋭い指摘に、インデックスは黙った。

そして、こくり、と頷いた。

「突っ込んでるからこそ言うんだよ。オカルト（こっち）は、科学（あなた）たちとは違うの。だから、知らなくていいかも」

ありがとね、とインデックスは笑った。

お腹いっぱいご飯を食べさせてくれてありがとう、と。

「ばいばい」

それだけ言うと、インデックスはすたすたと歩き去ってしまった。

美琴は動けなかった。

ビリ、と能力が漏れる。店員がビクッとこちらを見た。

「……なさけない」

インデックスは、あの変な少女は、居なくなってしまった。

そして多分、二度と会うことはないんだろうな、と美琴は思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7889y/

とある御坂と禁書目録

2011年11月23日15時56分発行